

中流住宅の平面構成に関する研究

第1報 序文・接客空間要求と近代住居理論

正会員〇青木 正夫*1 同 中園 真人 同 竹下 輝和
同 磯貝 道義 同 友清 貴和 同 宮崎 信行
同 岡 俊江 同 大津 博幸 同 深野木 信
同 永島 潮 同 秋元 一秀

1. はじめに

図-1のプランは、あるプレハブメーカーが都市居住者向に作成した宣伝パンフレットのプランである。売れ行きの良い、そして評判の高いプランである。しかしこうしたプランは、ごく最近まで、計画研究者から、矛盾の対象としてみられることはあっても、決してその存在の論理を追究される対象ではなかった。

こうしたプランの特徴は、第1に接客空間として座敷が確保されていること、第2にこの座敷に対して続き間を構成する「次の間」が確保されていること、そして第3に、家族内の住生活空間が、こうした接客空間と領域区分をなしていること、である(図-1, 参照)。

ところでこうした続き間型住宅とともに、もうひとつの潮流をなしている平面型は、居間中心型住宅である。図-2は、この典型プランともいえるものである。この居間中心型住宅は、住生活を家族内の公室群と私室群とに判然と分け、公室群の中心にだんらんの場としてリビングルームやダイニングルームを配した平面型で、いわゆるDK型からLDK型へ至、近代住居理論のひとつの到達点を示すものであり、近年まで公私室型生活の「理念」的プランとして評価されていた平面型である。

これらの平面型の最も対照的な諸元は、前者の続き間型住宅が接客機能を配慮して、接客空間と家族内住生活空間との領域を区分しているのに対して、居間中心型住宅は、例えば来客者の玄関から「座敷」へ至るア

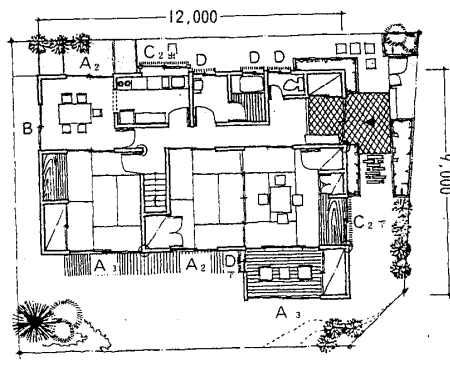
セスにおいてわざわざ家族の内なる空間である食堂や台所を通り抜かせたり、また来客者の便所への動線においても最も客からの視線が嫌われるサニタリーを通過させているように、接客空間と家族内住生活空間とが揮然一体となっている点である。

このように平面の構成原理が全く異なる平面型が、今日、ますます多様化している都市住宅において2大潮流をなしているという事実は、驚くべきことである。

さて、最近続き間型住宅は見直されようとしている。この組織的な見直し論は、独立住宅の平面類型から端を発し、一連の住宅の地方性論で展開されている。しかしながら、この見直し論も、理念としてある近代住居理論に根拠をおいた公私室型からの評価であり、公私室型生活に対して遅れた地方都市の住生活に対応したものである、と結論付けられようとしている。確かに、居間中心型は大都市に多く、逆に続き間型は地方都市に多いという蓋然的な事実は存在するが、だからと言って直ちに住生活の型まで、居間中心型=だんらん重視型、続き間型=接客尊重型と対立的に規定するのは、きわめて早計な結論である。

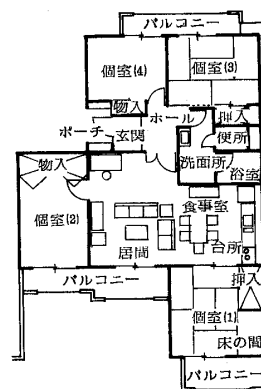
なるほど続き間型住宅は、居間中心型住宅と比べ、より接客を配慮した平面型であるが、全室数が5~6室という標準的な続き間型の都市住宅を概観すると、まずほとんどの住宅において、来客者のアクセスが、次の間経由型でなく、座敷直入型であること、従って次の間の機能が、接客のための続き間としての機能と同時に、日常的には家族の住生活行為が展開される家

図-1 広縁のある家。



中廊下を上手に生かして
じつにムダのない設計が
されています。広縁は和
室をいっそう広く利用で
き、和室の融通性をさら
に高めています。

図-2 居間中心型住宅(4LDK型)



族内生活空間としての機能を重合して持っていることから、「続き間」をそれ自体「格式空間」として一面的に規定することは困難な場合が多い。むしろ、接客系の核として座敷と持ち、そして家族内住生活空間との領域区内をなしながらも、接客空間と家族内住生活空間とが重合している平面型と位置付けられよう。

周知のごとく、もともと我国の住宅において、こうした接客空間と家族内住生活空間とは、住居内において、画然と分離されていたものであり、既に多くの指適があるように、その優位性は接客空間が保持していた。ところが、明治中期以降の近代的な生活の発展は必然的に家族の住生活機能の向上をもたらし、否応なしに家族内住生活空間の拡大が求められることになる。

この結果、特に中流住宅においては、従前接客空間としてあった領域が、相対的な接客機能の低下とともに家族内住生活空間の領域としてとり込まれ、接客空間と家族内住生活空間とが重合化する状況が生まれた。このまさに重合化のプロセスこそが、我国の近代住宅の発展をなす法則的な道筋とも言えるものであった。その後重合化は徐々に進んだが、家族内住生活空間が完全に接客空間を重合化し、そして融合化して一体となるには、より発展した住生活様式の確立を前提とした。しかしながら、この確立をなさずして我国は、不幸なことに、戦争という大きな障害を踏むことになった。戦争によって、生活の発展は停滞し、生活の著しい困窮化は、住宅水準を大きく低下させる結果を招いた。

そして、このぎりぎりの段階に追いつめられた状況のなかで作り出された住宅計画の理論が食寝分離論であった。ここでは、当時の住宅水準を反映して、最も本源的な住要求である食事と就寝という最低限の住生活行為の秩序化が対象化され、この安定的遂行のために食寝分離を満たす住空間構成を行うことが、改善の第一歩であるとされた。この画期的な住宅計画理論は、以後我国のぎりぎりまで追いつめられた住宅水準の改善に大きく貢献するとともに、その高度の理論体系は後に展開された住宅計画に大きな影響を与え、理論的基礎となった。

しかし反面、こうした輝かしい出発は、住宅計画研究にとって不幸な出発でもあった。というのは、食寝分離論は、法則概念的にはきわめて、即物的範疇であ

り、その認識も機能主義的なアプローチで可能であったが、これに対して以後の研究で対象化された接客要求やだらん要求は、より高次の文化的歴史法則概念で論じられるべきものであったからである。近年都市住宅の規模は、着実に拡大し、多様な住要求を実現しうる条件と契機が得られたにも拘らず、食寝分離論以降、庶民住宅を対象にして出発したこうした〈下〉からの近代住居理論は、容易にその門戸を開くことなく、また従前の発展も顧みることがなかった。このように

食寝分離論から始まった近代住居理論は、今日、大きな試練を迎えている。確かに科学的な実態調査をもとに構築された一連の研究成果は貴重である。しかし我国の住宅の近代化に大きく貢献したことは、歴然とした事実である。とにもかくにも我国の住宅は、多分にもれず近代的な様相をなし得ることができたが、こと接客空間のこととなれば、問題は別であり、まったくのてんやわんやの状態にある。

根強く残る接客空間の確保要求、そして続き間型住宅に対する根強い人気。こうした我国の住宅における接客空間の存在基盤そのものを解明する課題は、今後の新たな住宅計画の確立にあたって避けて通ることのできない重要な課題となっている。

本研究は、近代成立期以降に、都市俸給者向住宅としてあった、いわゆる「中流住宅」を対象として、その平面構成の発展を史的に考察するなかから、接客空間のあり方を論じようとする一連の研究である。

しかるに、我国における中流住宅の史的発展を究明する課題は、きわめて困難であり、既往の木村徳国氏の優れた業績においても、中廊下の導入論にみられるごとく、歴史的発展と論理的発展が混合された、観念的な史的研究に止っている。今、研究は、緒についたばかりで、全体的に脆弱な面を多々持つが、今回は、まず、中流住宅における平面の構成原理とその発展の仮説を示し(オ3,4報)、特に住宅史研究において、注目される明治中後期の中流住宅の平面構成の発展を、北入系列(オ5,6,7報)、南入系列(オ8,9報)で論じようとするものである。

*1九州大学教授・工博 *2同講師 *3同助手 **同大学院生